

ミュージアム研究員紹介

新任のご挨拶

岡部晋也

ふじのくに地球環境史ミュージアムで南アルプス学と環境学を担当する岡部晋也でございます。2026年4月1日に学芸課の主任研究員として着任しました。私は静岡に生まれ育ち、京都大学総合博物館と国立科学博物館にて研究を進め、地元静岡に帰ってきました。

静岡県の調査活動には2024年に三宅隆氏をはじめとした調査チームに加わって南アルプスで小型哺乳類調査を行った事で、静岡県自然環境保護調査委員会の哺乳類部会にお声掛けいただき、調査員としてレッドリストのデータ収集に取り組んできました。2025年には県東部と県中部の調査に山本幸介氏と大場孝裕氏ともご一緒させていただき、少しずつチームの一員として受け入れてもらい始めたのではなかろうかと嬉しく思います。これからも館内外の人々との繋がりを大切に、静岡県の哺乳類の研究を継続していきます。

自己紹介として、これまでの研究の歩みを綴らせていただきます。私は哺乳類学を専門に、主にアジアにおける小型哺乳類の多様性と進化プロセスの解明に焦点を当て、多角的かつ国際的に研究に取り組んできました。

まず、研究活動スタートの頃からフィールドワークを重視してきました。対象動物の生息環境に足を運び、東南アジアから東アジアにかけての真無盲腸目(旧食虫類)や齧歯目の系統分類をしてきました。東南アジアのインドシナ山岳地帯の調査に長く携わり、2023年にはベトナム最高峰からモグラの仲間、ファンシーパンミミヒミズを新種記載しました。地道なフィールドワークで得た標本を「地球の歴史」の証拠として読み解き、将来へ残すことで、今後も、静岡をはじめアジアの生物多様性の理解に貢献したいです。

次に、生物地理学に関わる研究では、生物多様性形成において山岳地形や標高分布がもたらす隔離と分化のメカニズムを



追求しています。日本産ヒミズ類2種の、それぞれ平地と高山に分布するヒミズとヒメヒミズ(モグラ科)の特性をいかして、日本列島の激しい高低差が遺伝的多様性の形成にどれほど寄与しているか調べております。

また、新しく始めた手法の1つに、X線マイクロCT撮影データを用いた3D形態データ構築と三次元画像による形態解析があります。この研究では、CTデータを用いて、適応進化の視点からモグラ類の形態と運動性を調べております。地中生活者として広く認知されるモグラの仲間ですが、実は地表、半地中、水陸など、地中以外にも多様な環境に生息しています。このように幅広い環境に適応できた理由を調べるため、体の形と動きからアプローチしております。

最後に、ミュージアムの末席に連なりまして、博物館活動として標本の収集・保管・研究・展示に加えて、アウトリーチと教育活動に取り組む機会を沢山いただくようになりました。多くの人に「それ気になっていた」と感じてもらえる幅広い「面白い」を伝えられるように努めていきます。南アルプスをはじめ、静岡の希少な自然と魅力的な文化を展示に表現することで、広く社会や次世代へ発信する活動に取り組んでいきます。